

# 1989年以降の幼稚園教育課程の基準と モデル・カリキュラム

水原 克敏

## 序 課題と方法

本稿は、1989（平成元）年から、1998（平成10）年、そして2008（平成20）年の3次にわたる幼稚園教育要領の改訂についてその特質を考察し、かつ、それぞれのモデル・カリキュラムについても特徴点を明らかにする。先行研究では、特色ある実践が数多く紹介されてはいるが、小中高の学習指導要領を含めた全体的視野が乏しく、さらに具体的なモデル・カリキュラムまでは追究されていない。本稿では、幼稚園教育のカリキュラムが、どのような経緯で今日に至っているのか、学習指導要領全体の動向を視野に入れて、その歴史的課題と展望を明らかにする。なお、1989年以前の教育課程の基準とモデル・カリキュラムについては、既に別稿で考察している<sup>1</sup>。

## 第1章 1989（平成元）年改訂「幼稚園教育要領」—環境による教育（新学力観）—

### 1. 環境による教育（新学力観）への転換

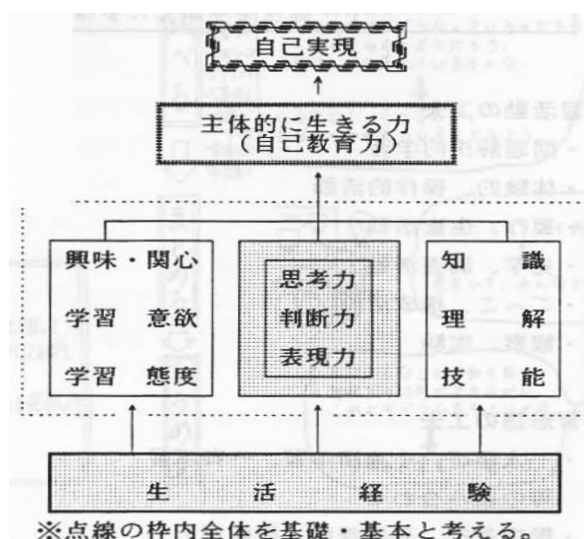
1989（平成元）年3月15日、幼稚園教育要領が改訂され、「今回の改訂は、社会の変化とそれに伴う幼児の生活や意識の変化に配慮しつつ、生涯学習の基盤を培うという観点に立ち、来たるべき21世紀に向かって、社会の変化に自ら対応できる心豊かな人間の育成を図ることを目指して行ったものである」と説明された<sup>2</sup>。前回の幼稚園教育要領は高度経済成長を目指した時期に改訂されたが、1980年代は低経済成長期となり、この間、社会は急激に変貌を遂げて、幼児をとりまく人々の生活意識も大きく変化した。高度経済成長後の「成熟社会」が政策的に提唱され、小中高では、1977（昭和52）年の学習指導要領改訂以来、「ゆとりと充実した学校生活」を志向する教育へと路線転換がなされたので、今回は、幼稚園も含めた幼・小・中・高を一貫した改訂が要請された。そのキーワードは「生涯学習の基盤を培う」「自己教育力の育成」につながる「新学力観」とされた。これまで学校教育だけで完結していた教育制度が、卒業後の生涯までも本格的な学習対象とする教育構想が立てられ、それを貫きとおすための「自己教育力」と、思考力・判断力・表現力に裏付けられた「新学力観」による教育が不可欠とされたのである。それは、教師の側から知識・技能を詰

め込んだり訓練したりするのではなく、幼児・児童・生徒が自らの関心・意欲・態度をもって課題に取り組み、思考力・判断力・表現力・論理的思考力・創造力・直観力・情報活用能力などをつけて、主体的に生きる力、すなわち「自己教育力」をつけようという理念である。21 世紀は変化の激しい社会が予想されるので、生涯を通じて学習し、逞しく生き抜いてゆくための基礎となる能力として構想されたもので、一言でいえば、「教え込み」から「主体的な学び」への「新学力観」である<sup>3</sup>。

前回の 1964（昭和 39）年改訂の幼稚園教育要領では、所定の目標にむけて領域ごとに教科指導的な系統性が重視され、かつ教師の側からの指示によって知識・技能・態度を習得させる教育の在り方が展開されてきた。その指示による教育のあり方を転換するために、幼稚園教育要領に関する調査研究協力者会議（以下、協力者会議）のまとめ「幼稚園教育の在り方について」（1986 年 9 月）では、「到達度、経験や活動の順序性を一律に示すことはしないこと」、及び「教育内容・方法は、幼児の生活を中心とし、直接的・具体的な経験や活動と総合的な指導を重視したもの」とすることが確認されている。同時に前回の幼稚園教育要領に対しては、「①幼稚園教育の基本的な概念が余り明らかにされておらず、教師の創意・工夫のもととなる共通理解が得られにくい。②多様なねらいが網羅的に羅列されており、全体を構造的に理解しにくい」、あるいは、「発達の個人差に、より適切に対応した指導が求められている実態がある」。「幼稚園教育の独自の役割を果たしつつ、家庭・地域社会や小学校との連携について重視する必要が増大している」などの問題点も指摘されており、かなりの批判的認識が背景にあったものと推測される<sup>4</sup>。

1989 年改訂は、本質的には系統主義から「環境による教育」への大転換である。改善の視点として協力者会議は（1）幼児の主体的な生活を中心に展開、（2）環境による教育、（3）一人一人の発達の特性及び個人差、（4）遊びを通しての総合的な指導という新方針を打ち出した<sup>5</sup>。「幼稚園教育要領の改善に関する調査研究協力者会議」委員高杉自子は、次のように説明した。「幼児が自ら環境にかかわって成長発達すると考えたとき、まず必要なのは心情・意欲・態度を育てることではないかと考えたのである。知識・技能は、心情・意欲・態度が育つことで、自ら獲得できるからである」。「幼児が主体的に環境に自らかかわり、環境に取り組み、その中から自分に必要なものやこと、ことがらを取りこんで、自らの生活を創りだす力としなければならない」。「『自らを創りだす子どもに変化させる力をもつ子ども』を目指すのである。すなわち自己形成能力、自己教育力をもつ能動的な子どもを育てることが大切なのである」と<sup>6</sup>。この説明は、関心・意欲・態度から学習に入り、思考力・判断力・表現力を内包した知識・技能を習得することが期待されている「新学力観」（図表 1）に通底するものである<sup>7</sup>。

幼稚園教育要領の総則、1. 幼稚園教育の基本では、上記（2）「環境による教育」の項目は、総則の冒頭に「格上げ」され、「幼稚園教育は、幼児期の特性を踏まえ環境を通して行うものであることを基本とする。このため、教師は幼児との信頼関係を十分に築き、幼児と共によりよい教育環境を創造するように努めるものとする」と強調された。教師は上からの教え込みではなく、「幼児



図表1 新学力観の概念図

と共によりよい教育環境を創造する」ことを通して教育するという考え方で、幼児の成長を促す環境づくりと「援助」が教師の仕事となった。平成元年の幼稚園教育指導書には、「教師の援助」という言葉が多用されている。前回の幼稚園教育要領との違いを分かりやすく明示するために、このような表現をとったものと思われる。幼稚園教育の基本では、「環境による教育」の下、3項目が立てられた。(1)「幼児の主体的な活動を促し幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること。」(2)「遊びを通しての指導を中心として」「ねらいが総合的に達成されるようにすること。」(3)「幼児のそれぞれ異なることなどを考慮して幼児一人一人の特性に応じた発達の課題に即した指導を行なう」こと、と<sup>8</sup>。

ここでのポイントは「幼児期にふさわしい生活」である。今回の要領は「幼児の生活主義」と言ってもよいくらいに『幼稚園教育指導書 増補版』には、かなりの頻度で「生活」のタームが使用されている。指導書第1節の「1 幼児期の生活、(1)生活の広がり ①生活の場 (2)幼稚園の生活 ①同年代の幼児との集団生活を営む場であること ②幼児を理解し、適切な援助を行う教師と共に生活する場であること」という章節構成で、「生活」の入ったタームを羅列すると、「幼稚園生活」「集団生活」「他の幼児たちと生活を共にしながら」、「新たな生活の広がり」、「幼児の生活は、家庭、地域そして幼稚園と連続的に営まれているものであり」、「共通の興味や目的をもって生活を展開する楽しさを味わえるようになる」、「一緒に活動することで、生活がより豊かに楽しく展開できることを体験し」等々である<sup>9</sup>。「生活」の代わりに「活動」や「交流」を入れても可能な文章であるが、どうして「生活」なのであろうか。概念だけで見れば「活動」や「交流」は狭く限定できるが、「生活」は幼児のすべてを含んでしまい広すぎて曖昧であるが、どのように捉えたらよいのであろうか。

協力者会議委員の高杉自子（高杉教育研究所主宰）は、「生活の場としての幼稚園」について倉

橋惣三の説をあげて次のように解説する。「幼稚園が生活の場であるということは、今から数十年前より、倉橋惣三が言い続けたことである。彼は幼児の内面的な生活の必要を提唱している。特に自発的な生活と相互的な生活が必要であって、ありのままのさながらの生活を幼稚園という場へもちこみ、それを先生と子どもと一緒に生活しながら、より必要で、よりよい生活へ作りあげていく、すなわち、『生活を、生活で、生活へ』という営みの必要を説いている」。そのような「生活の場としての幼稚園」であれば、教師は、「具体的なねらいと幼児に経験させたいという内容を環境に含ませて環境を構成する。その環境に幼児がかかわって活動を起こす、それを教師と幼児が活動を共有し、教師の援助活動によって、あるいは環境の再構成によって、幼児の成長発達に必要な経験を変えていくという図式に変わったのである」と解説した<sup>10</sup>。

これまでのように「望ましい経験」という目標を設定して、それに向けて躰け訓練するのではなく、まずは、子どものありのままの生活があり、その生活に即した主体的な活動から、個性を伸ばしていこうという発想である。この時代は、高度経済成長が過ぎ、ひとつのステージを達成した「成熟社会」になったと捉えられ、ようやく「一人一人」に対応した保育が注目されることになったのである。経済的に貧しい時代においては、とにかく豊かになるために、幼稚園から高校まで、つめこみの訓練で全体の知的・技能的・道徳的水準を一律に強制的に高めようとしてきた。しかし、高度経済成長を経た「成熟社会」を迎えた平成元年段階に至って、全体よりも個々人の関心・意欲・態度を重視し、思考力・判断力・創造力につながる「新学力観」による教育が志向されることになった。その一環で幼稚園教育要領も見直され、倉橋惣三的な「生活」観が大きな影響を与える改訂になったものとみられる。倉橋惣三の「生活観」に戻るところは、小中高関係者にはない幼稚園教育特有の発想である。「新学力観」と親和性はあるが、しかし同一コンセプトではないので、徐々に、小中高との連続性にある種の断絶をもたらすことが予想される。なぜなら 1989 年学習指導要領改訂で、小学校の「生活科」創設をはじめとして中高でも一定の生活化は進められるが、この改訂に限らず以後の小中高の改訂では、必ずしも倉橋惣三の「生活観」に基づいてはいないからである。

倉橋は、『系統的保育案の実際』（東京女高師附属幼稚園編 昭和 10 年）での解説において、「幼稚園は、幼児の世界である。そこでは、一切が幼児の生活に出発し、幼児の生活に帰着する。その幼稚園における幼児の生活を、発揮せしめ、充実せしめ、その正しき発展を経過せしめる途が保育案である。それは、どこまでも、幼児の生活以外の何ものでもない。教育というも、幼児の生活裡に機会を補足して、これに適切なる誘導と指導とを与えるに他ならない」と述べている<sup>11</sup>。また、「人生教育の全過程に対する基本として、真乎重要なるものは、知能の早き獲得にあらずして、生命の発展勢力の増進と統制とにある」。「就学前教育は根の教育である。根の力は、自己発展力である。すなわち、就学前教育は自己発展力の教育である。」（「就学前教育」）と述べている下りは<sup>12</sup>、生涯にわたる自己教育力を主軸とした平成元年度学習指導要領改訂の精神とは一定の親和性が見られるが、上位の学校に接続する直接的な準備教育の視点は感じられない。



倉橋は、「生活の実質と自然とが、幼児において最もよく行わるるものは遊戯である。」（「就学前の教育」）と述べているが<sup>13</sup>、幼稚園教育要領でも「(1) 幼児期にふさわしい生活の展開」に次いで重視している第2点は、「(2) 遊びを通しての総合的な指導」である。「この時期の遊びは大人の社会で言う仕事や勉強と対比させていう遊びとは異なり、幼児が自分から興味や関心をもって環境に主体的、意欲的にかかわり、心や体を働かせて活動をつくり出し展開する動きの全体を指しているものである」と捉えられている。そのような「遊びの展開に応じて適切な指導を行い、幼稚園教育のねらいが総合的に達成されるようにすることが大切である」。「幼児自身が遊びを通して体験を積み重ねていく姿を大切に受け止め、その姿に応じた柔軟な指導を行っていく必要がある。このような幼児の生活の時間を大切にして行う指導は、必然的に総合的なものとなる」というのである。そして第3点は、「一人一人の発達の特性に応じた指導」で、上記2点からそれぞれの生活と遊びを重視すれば、当然の帰結である<sup>14</sup>。

次に幼稚園教育の目標を検討する。同要領では、「幼児期が生涯にわたる人間形成の基礎を培う時期」であると確認し、5つの目標が設定されている。目標では、(1) 基本的な生活習慣・態度を育てることで「健全な心身の基礎を培う」ことと、(2) 自立と協同の態度及び道徳性の芽生えなど社会性を培うこと、生涯にわたる自己教育力の基礎を育成することが重視された。家庭教育力と地域の教育力の低下が叫ばれている中で、日常生活の中での態度・習慣・道徳性を形成することが重視されたのであろう。これは、小学校の「生活科」（自立への基礎を育成）につなげられることになる。文字・数字の一斉指導などが問題視された経緯を踏まえるなら、知識の教育よりも人間形成の基礎を目標の(1)(2)としたことは、その力点の在り方として注目すべきであろう。(3)は、自然現象に対する興味関心・思考力の形成についてであるが、前回の幼稚園教育要領と比較するなら、「自然及び社会の事象」とあったのが、「自然などの身近な事象」となり、「社会」のタームが削除されている。小・中・高における社会科学軽視の動向と合わせて注目される。また、小学校以降の学習に繋げられる思考力の芽生えを、生活態度・道徳性の芽生えに続いた項目としていることも、小中高一貫性確保の観点から注目される。(4) 言葉への感覚を養うことは、従来は、「正しい使い方を身につける」とあり、これを削除したのは、文字の一斉指導に陥りかねない問題があったことをふまえたものと考えられる。(5)は、体験による学習によって感性及び創造性を養うというものである。(5)の従来の方針は、「のびのびとした表現活動を通して」であったが、「多様な体験を通じて」と改訂されたことも、「子どもの生活」重視の考え方や実体験が減少してきたという時代背景に対する問題意識が感じられる。

次に第2章「ねらい及び内容」についてみると、今回の改訂で最も注目されたのは、6領域から5領域への変更で、「健康」・「人間関係」・「環境」・「言葉」・「表現」である。要領第2章「ねらい及び内容」には、「この章に示すねらいは幼稚園修了までに育つことが期待される心情・意欲・態度など」であり、「これらを幼児の発達の側面から、心身の健康に関する領域『健康』、人とかかわりに関する領域『人間関係』、身近な環境とかかわりに関する領域『環境』、言葉の獲得に関す

る領域『言葉』、及び感性と表現に関する領域『表現』という5領域が設定された。協力者会議委員高杉の解説によれば、「いままでの6領域というまとまりは、幼児が将来学習するであろう文化、すなわち教科に直結できるような窓口をつくり、教科に似せた名称をつけた。したがって、教科とは違うといいながらも、それにつなげてしまうので教科的な扱いとなる。知識・技能を育てたくない」という欠陥があったという。倉田惣三の言う「技芸教習所」に幼稚園がなってしまったという認識であろう。「そこで今回、どうしても教科と直結できない窓口を設定したいと考えた」。それはいかにして可能か。「一つの狙いを身につけるためには、多様な生活経験が必要であり、あるいは一つの活動を見る時にも多様な見方でとらえることが必要」で、到達目標に向けて領域を教え込むではいけない。その意味で、「今回のねらいが、発達の側面から、心身の健康に関する面、人のかかわりに関する面、身近な環境とのかかわりに関する面、言葉の獲得に関する面、感情と表現に関する面は、活動を見るとき、子どもを見るとき、の視点となるのである。発達を見る窓口ということは、幼児にはこのような発達の側面を育てる必要がある。「今までの6領域が5領域になったのではなく、全くとらえ方が違ったのである。」「5つの領域に示されたねらい、つまり15のねらいから、子どもの育ちを見ようということ」であると説明された<sup>15</sup>。

15のねらいとは何か。それは5領域ごとに3つのねらいが設定され、さらに領域ごとに内容10項目程度、かつ留意事項が規定されている。まず、領域「健康」であるが、「この領域は、健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う観点から示したものである」として「観点」であることが明示され、「1. ねらい」では、(1) 明るく伸び伸びと行動し充実感を味わう。(2) 自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする。(3) 健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付ける、という3点で、前回の要領の領域「健康」に比して、積極的な自己充実感の育成が主となり、習慣や態度を身に付ける面的側面は後退している。「2. 内容」として(1) 先生や友達と触れ合い、安定感をもって行動する。(6) 身の回りを清潔にし、衣服の着脱、食事、排泄など生活に必要な活動を自分でする。(9) 危険な場所、危険な遊び方、災害時などの行動の仕方が分かり、安全に気を付けて行動する」などで、前回の「望ましい経験や活動」の小項目24が整理されて、ねらいに即した項目が約3件ずつ配置されて全9項目である。「3. 留意事項」では、(1) 「幼児が教師や他の幼児との温かい触れ合いの中で自己の存在感や充実感を味わうことなどを基盤として、心と体の健全な発達を促すこと」、(2) 「幼児の生活と遊離した特定の運動に偏った指導を行うことのないようにすること」が求められた。やはり自己の充実感を培い、上からの面的訓練的な活動は抑制されている。

領域「人間関係」は、「他の人々と親しみ支え合って生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養う観点から示したものとされ、ねらいは、「(1) 幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。(2) 進んで身近な人とのかかわり、愛情や信頼感をもつ。(3) 社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける」という3点で、前回の要領の領域「社会」に比して、自己を肯定し充実させ自立への基礎を培う性格の強いものとなっている。内容は、「(1) 喜んで登

園し、先生や友達と親しむ。」「(10) 自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもつ」など 10 項目で、上記ねらい 3 点を実現する上で不可欠な内容が、それぞれ 3 点程度で全 10 項目となっている。前回の要領の「ねらい」ごとに「望ましい経験と活動」の小項目がそれぞれ 10 項目で合計 27 項目であったことに比較すれば、かなり絞られたことがわかる。留意事項として、(1)「多様な感情を体験し、試行錯誤しながら自分の力で行うことの充実感を味わうことができる」ようにすることと、(2)「生活を通して親の愛情に気付く、親を大切にしようとする気持ちが育つようにすること」の 2 点で、自己の生活の確立と両親への感謝がポイントである。

領域「環境」は、「自然や社会の事象などの身近な環境に積極的にいかかわる力を育て、生活に取り入れていこうとする態度を養う観点から示した」という。目標で落とされた「社会」がここでは入っているが、次のねらい 3 項目では重視されていない。ねらいは (1)「身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。(2) 身近な環境に自分からかかわり、それを生活に取り入れ大切にしようとする。(3) 身近な事象を見たり考えたり扱ったりする中で、物の性質や数量などに対する感覚を豊かにする」という 3 点である。内容は、「(1) 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。」「(8) 日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ」などのほか、「社会」に相当する内容では、「(9) 生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ。(10) 幼稚園内外の行事において国旗に親しむ」などが挙げられ、全 10 項目である。留意事項では、「自分からかかわろうとする意欲を育てる」ことと、「親しみや畏敬の念、生命を大切にする気持ち、公共心、探究心」などが挙げられており、身の回りの自然・事物に積極的に関心をもたせつつ、かつ、畏敬の念や国旗へのアイデンティティ育成がポイントである。数量の教育については、「数量などに関する興味や関心、感覚が無理なく養われるようにすること」など、教え込みを抑制する注意が前回同様に見られる。なお、前回のねらいにあった「身近な社会の事象に興味や関心をもつ」ことの育成については後退している。

領域「言葉」は、「経験したことや考えたことなどを話し言葉を使って表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚を養う観点から示した」とされる。ねらいは、「(1) 自分の気持ちを言葉で表現し、伝え合う喜びを味わう。(2) 人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話そうとする。(3) 日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、想像力を豊かにする」という 3 点である。前回の要領のねらいに比して、「聞いてわかる」よりも、まずは自分の気持ちなど自己表現を第一に重視している点に変化である。前回は「聞いてわかる」ことや「聞き取る態度」など受け身的態度が重視されたが、今回の内容を見ると、「(1) 先生や友達の言葉や話に興味や関心を持ち、親しみをもって聞いたり話したりする。(2) したこと、見たこと、聞いたこと、感じたことなどを自分なりに言葉で表現する。」など、自分を積極的に表現する能動的態度が重視され、前回の「望ましい経験や活動」22 項目は全 10 項目に整理された。留意事項では、(1)「自分の感情や考えを伝え合う喜びを十分に味わう」ことが求められ、他方、「文字に関する系統的な指導は小学校から行われるもので、幼稚園に

においては直接とりあげて指導するのではなく個々の幼児の文字に対する興味や関心、感覚が無理なく養われるようにすること」とあり、文字の系統的な指導は抑制された。

領域「表現」は、「豊かな完成を育て、感じたことや考えたことを表現する意欲を養い、創造性を豊かにする観点から示した」とある。この領域は、従来は「音楽リズム」と「絵画製作」の領域が担っていたものであるが、まず、ねらいは「(1) いろいろなものの美しさなどに対する感性をもつ。(2) 感じたことや考えたことを様々な方法で表現しようとする。(3) 様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう」という3項目で、音楽や絵画に限らず、美的感性と表現力の育成がねらいとされた。内容は、(1) 生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いて楽しんだりする。(6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう。(7) かいたりつくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり飾ったりする、など全8項目で、留意事項では、「(3) 幼児が自分の気持ちや考えを素朴に表現することを大切にし、生活と遊離した特定の技能を身に付けさせるための偏った指導を行うことのないようにすること」と、楽器の技能練習的な訓練は行わないことが注意された。前回は、楽器の「基礎的なひき方の指導を加えたり、可能な場合には簡易な分担奏や合奏を楽しませたりすること」までの指導が推奨されていたことに比べるなら、今回は、幼児の生活に即した素朴な表現を強調していることが特徴である。

## 2. 遊びからごっこへのモデル・カリキュラム

さて、以上のように5領域をふまえるなら、教育課程はどのように編成されるのであろうか。指導書では、「これまでの幼稚園教育においては、教師が望ましいと考える活動を幼児に行わせようとする傾向が多く見られていた」と批判的に総括され、要領第3章「指導計画上の留意事項」の「2 特に留意する事項」でも、これまでの教師主導の行事中心の在り方が戒められた。(6) 行事の指導の在り方について、「幼稚園生活の自然な流れの中で」「幼児が主体的に楽しく活動できるようにすること」と、あくまでも「幼児の主体性を大切にすること」が重視されている。ただし、幼児の主体性を大切にと言っても、「幼児の行う活動をそのままに放置したり教師の計画性のある指導を否定したりすることではない」という。「計画性のある指導をおこなわなければならない。計画性のある指導とは、あらかじめ立てた計画を念頭におきながら実情に応じた柔軟な指導を行うという意味であって、計画したとおりに指導するということではない」。指導計画は「あらかじめ考えた仮説であることに留意して指導を行うことが大切である」というのである。そして、指導計画の実際においては、「指導計画を作成し実際の指導を展開するに当たっては、環境をどのように作り出していくかが、幼児が主体性を十分に発揮しながら具体的なねらいに向って必要な体験を得ていけるかどうかを左右する鍵となる」として「環境の構成」が強調されている<sup>16</sup>。




活動の展開と教師の援助について、次のような過程で進められるという。①具体的なねらいや内容にもとづいて環境を構成する。②幼児が自ら環境にかかわって活動を展開する。③幼児が望ましい方向に向かって活動を展開していけるように教師が適切な援助を行う。「具体的なねらいと内容」



から「環境の構成」へ、その「環境の構成」には教師と幼児が共に関わり、「望ましい方向への活動」が進行し始め、その活動の進展によって「環境の再構成あるいは直接的な援助」が必要となる、というプロセスで、教師のやるべきことは指導ではなく「援助」という位置づけである。従来の指導中心の保育の在り方を否定して「援助」という概念が使われていることは重大な転換である。従来は、「生活習慣の形成という言葉から、単にある行動様式を繰り返して行わせることによって習慣化させようとする指導が行われがちであるが、生活に必要な行動が身に付くためには、自立心とともに、自己発揮と自己抑制の調和のとれた自律性が育てられなければならない」という指導書の説明で<sup>17</sup>、あくまでも幼児の主体性と自律性を尊重し、これに裏付けられた自立する子どもを育成することが1989年改訂の目的であった。

具体的なカリキュラムはどのように作成すればよいのであろうか、協力者会議委員執筆の解説書に掲載されたモデル・カリキュラム『山の音楽家』の楽器あそびからごっこを楽しむ」（図表2）は、5歳児男子16名、女子16名対象で10月27日～11月2日までのカリキュラムである<sup>18</sup>。やはり従来のカリキュラムとちがって、領域に応じたカリキュラムではなく、まず、日時の軸のほか、上段には、「環境構成と幼児が生み出す活動の流れ」と「保育者の援助・考え方」との2軸構成で作成されている。「保育者の援助・考え方」を見ると、「幼児が部屋に戻り始めたころあいを見、他の遊びが始まらないうちに一緒に環境をつくるようにする」とある。「環境構成と幼児が生み出す活動の流れ」では、「戸外遊びから戻ってくる幼児が三分の一ほどになったころ、遊戯室に誘う。準備しておいて道具や材料で場作りをし表現する」という。見込としては、「小鳥、タヌキ、子リスなどの家囲いを作り、出たりはいたりして遊んだ後、知っている『山の音楽家』の歌を交替で身体表現しながら歌う」とある。以下、掲載の図表の通りであるので省略するが、まさに「あらかじめ考えた仮説」としての指導計画であり、この通りに進行するかどうかは、子どもたちの活動の発展しだいということで、教師は、さまざまな予測と期待をしながら、環境構成に努力しなければいけない。そして、その総合的な活動全体を通して、5領域の観点から、調和的に発達しているかどうかを評価し、たえず指導計画を再構築しては環境の再構成をする。子どもたちにとっては「遊び」であるが、まさにその「遊び」を通して「よく見よく聞きよく考える意欲や態度を身に付ける」ことが期待されている。全体の目的としては「幼児の自立心」を育てることであるが、そのためには「他の幼児とのかかわりの活動を展開する中で生活に必要な習慣を身に付け」、かつ「道徳性の芽ばえ」も培うことが期待されている。

以上のように、カリキュラム作りはねらいが達成できるように教師が環境を準備し構成するところから始まる。その場合、子どもの「生活」を最大限尊重して「遊び」を大切にし、幼児の興味や関心と発達に応じて環境を再構成するという仕方である。その点、領域ごとに「望ましい経験や活動」を教師の側から計画的に配列した従来のカリキュラムとは大きく異なるところである。

日 時	環境構成と幼児が生み出す活動の流れ	保育者の援助・考え方
10月27日 10:40	<p>戸外遊びから戻ってくる幼児が三分の一ほどになったころ、遊戯室に誘う。準備しておいた道具や材料で場作りをし表現する。</p> <p>遊戯室</p> 	<p>○幼児が部屋に戻り始めたころ合いを見、他の遊びが始まらないうちに一緒に環境を作るようにする。</p> <p>○小鳥、タヌキ、小リスなどの家園いを作り、出たりはいたりして遊んだ後、知っている「山の音楽家」の歌を交替で身体表現しながら歌う。</p>
11:20	<p>用意しておいた楽器の箱を自由にとらせる。</p> <p>自分たちの表現に合わせて選ぶ。</p> <p>歌ったり踊ったり楽器を打ったりする。</p> 	<p>○楽器を持って役割ごとに表現し、第10小節目からリズムに合わせて打つ。最後は全員が打つようなストーリー性を描き、幼児の意見を取り上げていく。</p>
12:00	<p>幼児の声を聞きながら、楽器遊びに発展させる。</p> <p>歌ったり踊ったり楽器を打ったりする。</p> <p>この遊び場で昼食を食べたい幼児を認める。</p> <p>昼食を食べる。</p>	<p>○役を交替しながら何回か行い、楽しいという思いを残していく。</p>
10月28日 11月2日	<p>友達と遊ぶ。</p> <p>動物ごっこをする。</p> <p>遊びに使う物を作る材料を出す。</p> <p>イメージを引き出す。</p> <p>場を広げたり不用な物をかたづける。</p> 	<p>○まだ続けて遊びたい幼児には、その場で昼食を食べられるよう整える。</p> <p>○食べ終わるころ、身につけたり遊びに使う物を作る材料を提示して、次の遊びの方向を幼児が見つけていくようにする。</p> <p>○学級全体での共通経験を基に役になって遊ぶことから自然物を使った楽器作り、「山の音楽家」の曲を使った合奏へと幼児の動きに合わせて援助する。</p>

図表2 『山の音楽家』の楽器あそびからごっこを楽しむ

## 第2章 1998（平成10）年改訂「幼稚園教育要領」

### —環境を通した教育と教師の役割—

#### 1. 環境を通した教育と早期教育への批判

1998 年 12 月 14 日 文部省告示第 174 号により、幼稚園教育要領が改訂された。この改訂に至る過程では、1997（平成 9）年 11 月 4 日、協力者会議によって「時代の変化に対応した今度の幼稚園教育の在り方について」（以下、最終報告）がまとめられているので、これを踏まえることで、幼稚園教育要領の改訂意図を明らかにすることができる<sup>19</sup>。

要領の第 1 章総則「1 幼稚園教育の基本」では、「環境を通して行う」という前回の大原則は継承され、(1) 幼児期にふさわしい生活の展開、(2) 遊びを通しての指導、そして (3) 幼児一人一人の特性に応じた指導という 3 点も変化ないが、教師の計画的な指導性が改訂の第 1 点である。「幼児の主体的な活動が確保されるよう幼児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成しなければならない。この場合において、教師は、幼児と人やものとのかわりが重要であることを踏まえ、物的・空間的環境を構成しなければならない。また、教師は、幼児一人一人の活動の場面に応じて、様々な役割を果たし、その活動を豊かにしなければならない」と要請された<sup>20</sup>。幼稚園教育要領作成協力者の柴崎正行は座談会において、「平成元年の改訂が終わった後、私も普及活動をさせてもらったわけですが、一人一人の子どもが自己充実するような援助を大切にするような援助をするということ」、「子どもの視点に立つんですけども、そうすると教師が何をするのか、教師側から何をするのかというのがなかなか伝わりにくかった」と回想している。これに対して高杉自子は「その教師論を変えていくのは大変でしたね」と応じ、森上史朗は「そこで平成 10 年改訂では、教師の役割を強調しようということになったわけですね。」と述べている<sup>21</sup>。そのような意見が反映して、最終報告では、「幼児の主体的な活動としての遊びを中心とした教育の実践を進めるためには、教師が遊びにどうかかわるのか、教師の役割の基本が理解されなければいけない。現行の幼稚園教育要領では、この点について十分述べられておらず、教師の間で共通理解ができていない面があり、一部には、自由に任せていればいいといった誤解を招いていた面もある」と反省され、上記のような「総則」の改訂がなされたのである。

最終報告及び『幼稚園教育要領解説』では、教師の役割について、「2 つの基本的役割がある」としている。ひとつは、前述の「物的・空間的環境を構成する役割」である。「特にものとのかわりが重要であるとの認識をもつてものの質や量をどう選択し、空間にどう設定するかを考えて環境を構成していく」ことであると説かれた。もうひとつは、教師自身が幼児と関わる役割である。これについては 5 点指摘され、第 1 は「幼児の精神的安定の拠り所としての役割」、第 2 には「憧れを形成するモデルとしての役割」、第 3 には「幼児との共同作者」、「幼児と共鳴する者」、第 4 は、「幼児の理解者」そして第 5 は「幼児の遊びの援助者」としての役割である。このような幼児との関わりを通じて物的・空間的環境を構成する役割を果たすことが教師に求められたのである。その

場合、「幼児の活動が精選される環境の構成」となることが期待されている<sup>22</sup>。

注目すべき第2点は、幼稚園への就園率が上昇してきている事態に対して、3歳児からの3年保育のカリキュラム編成が課題とされたことである。しかも、そのあり方として、「自我の芽生え」に対応すべき配慮が求められたことも注目しなければならない。改訂のこの時期は、学校全般に、「現在の子どもたちの心の問題として懸念されているいじめ、不登校、思春期の問題行動などの背景」があり、小中高全般につめこみ教育が反省され、「自ら学び、自ら考え、生きる力」となる学びが重視されて「総合的な学習の時間」が設置されるに至る。前回の平成元年の学習指導要領改訂以来、主体性や人間性を回復し「自己を確立」させることは重視されていたが、幼稚園教育においても、3歳児保育の本格的な始まりに対応して、「自我の芽生え」を尊重したカリキュラムのあり方が求められることになった。

幼稚園教育要領第1章の「3 教育課程の編成（1）」において、「特に、自我が芽ばえ、他者の存在を意識し、自己を抑制しようとする気持ちが生まれる幼児期の発達の特徴を踏まえ、入園から修了に至るまでの長期的な視野をもって充実した生活が展開できるように配慮しなければならない」とされ、これは「自我の芽生え」は「教育課程編成の中心的な軸」として導入されたのであった<sup>23</sup>。最終報告では、「幼児期は、子どもたちが生涯にわたり自分らしく生きていくための基礎を培う大事な時期である。幼児期において自我が発達していく過程は、自我が芽生える時期と他者の存在を意識できるようになる時期に大きく分かれる。前者の時期ではまだ自己を表出することが中心の生活であるが、後者の時期になると他者を意識して思いやったり自己を抑制しようとする気持ちが生まれるようになる」として、幼稚園教育では、これに対応したきめ細かな指導を行うことが求められた。

その際、「3歳児保育に対する配慮」が強調されている。「特に、近年就園率が大きく伸びている3歳児については、自我の芽生え始める時期であり、家庭での経験の差や個人差が大きい時期でもあるという発達の特徴を踏まえ、一人一人に応じたきめ細かな対応が求められている。さらに3歳児の生活リズムや安全面に配慮した環境にすることや3歳、4歳、5歳の3年間の生活を見通したカリキュラムを作成することなど各々の幼稚園で一層きめ細かな対応が図られるよう配慮事項を示すことが必要である」と。3歳児からの3年保育のカリキュラム作成という新たな時代に対応した方策を立てることが求められ、しかも前述のいじめ・不登校や思春期の問題行動への対応策としても「自我の形成」が重視されていたことを想起するなら、「自我の芽生え」に備える3歳児保育がいかに重視されていたかが分かるであろう。

注目すべき第3点は、「生きる力」の基礎となる心情・意欲・態度の育成するために、遊びを通して自然体験や社会体験などをする必要性が強調され、いわゆる「早期教育」が有害であると厳しく批判されたことである。むしろ、「自然の偉大さ、美しさ、不思議さなどに直接触れる体験を通して、幼児は心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力等の基礎」が培われ、また、地域の人々との交流、特に、「障害のある幼児」や「高齢者と実際に交流し触れ合う体験をもつこと」



が重要であるとして求められた。

また、いわゆる「早期教育」については、従来から、文字や数量の学習に対しては極めて抑制的な記述であったが、今回も「早期教育」は厳しく批判された。「受験などを念頭におき、もっぱら文字や数量などの知識を獲得することを先取りするような早期教育は、将来にわたり幼児の知的発達を促すことにはつながらず、むしろ調和のとれた発達を阻害するとの懸念を持たざるを得ない」。「本当の意味での知的発達を促す教育とは、将来にわたり学ぶ力の源泉となり、生涯学習の基礎を形成していくものであり、それは目先の結果のみを問題にしている早期教育とは本質的に異なるものである」と。その上で、「幼児期の知的発達は遊びの中での直接的・具体的な体験を実現されていく。幼児は遊びを通して周囲の環境や友達と直接かわり、見たり、触れたり、感じたりすることにより、周囲の世界に好奇心や探究心を抱くようになり、ものの特性や操作の仕方、世の中の仕組みや人々の役割などに関心をもち、物事の法則性に気付き、自分なりに考えるようになる。また、生き物に対する接し方や生命の尊さなどを学び、周囲の環境や生き物に対する豊かな感性や思いやりも具体的に身に付けていく。さらには、そこで感じたこと考えたことを言葉や動きや記号などを用いて表現し、相互に伝え合うことを通して、文字や数量に対する感覚やその記号的意味に気付き、自分たちの遊びを充実させていく」というように、あくまでも「遊びを通して」、文字や数量ひいては記号への認識を深化すべきことが強調されている。

しかし、それだけで、文字や数量や記号に関する気づきが十分に深まるであろうか。教師はどのように指導すればよいのであろうか。最終報告は、次のように論じる。「教師の役割は、幼児が文字や数量に十分に触れられるような環境を作り出すことと幼児がそうした環境にかかわり記号としての言葉や文字を用いて十分に表現したり伝えたりできるように一人一人の幼児に応じて援助していくことである。その際、教師が幼稚園の生活環境の中に文字や数量にかかわる体験が豊かにあることを認識し、その機会を生かすことが求められる。こうした幼稚園における具体的な場面に応じた個別の指導を基盤にして、小学校において文字や数量に関する指導が適切に行われるべきことを、幼稚園関係者だけでなく、親や小学校関係者にも理解されることが必要である。」と。

教師の役割は、幼児が文字や数量について自然に関心を持ち認識を深めるような企画を準備する、あるいはそういう関心や認識の機会を逃さないで「援助」するなどの指導性を発揮することが求められている。その場合、小学校のように学級で一斉に指導するのではなく、一人一人の遭遇する具体的な場面や機会を生かして、個別に対応することが奨励されている。文字や数量や記号を教えないのではなく、それらに関わる「体験が豊か」になるように企画し、一人一人の「機会を生かす」仕方で、個別に認識が深まるように「援助」するということである。「以上述べてきたとおり、遊びを通して周囲の環境に触れ、知性や感性をともに働かせ、その意味と仕組みについて考え、それを周囲の人々と共有していく過程そのものが幼児期における知的発達を促す教育であり、小学校以降の教育で求めている自ら学び、自ら考える生きる力の基礎を形成していくことになる」というのが基本的考え方である。以上が教育内容に対する要請であるが、前回の幼稚園教育要領を基本的

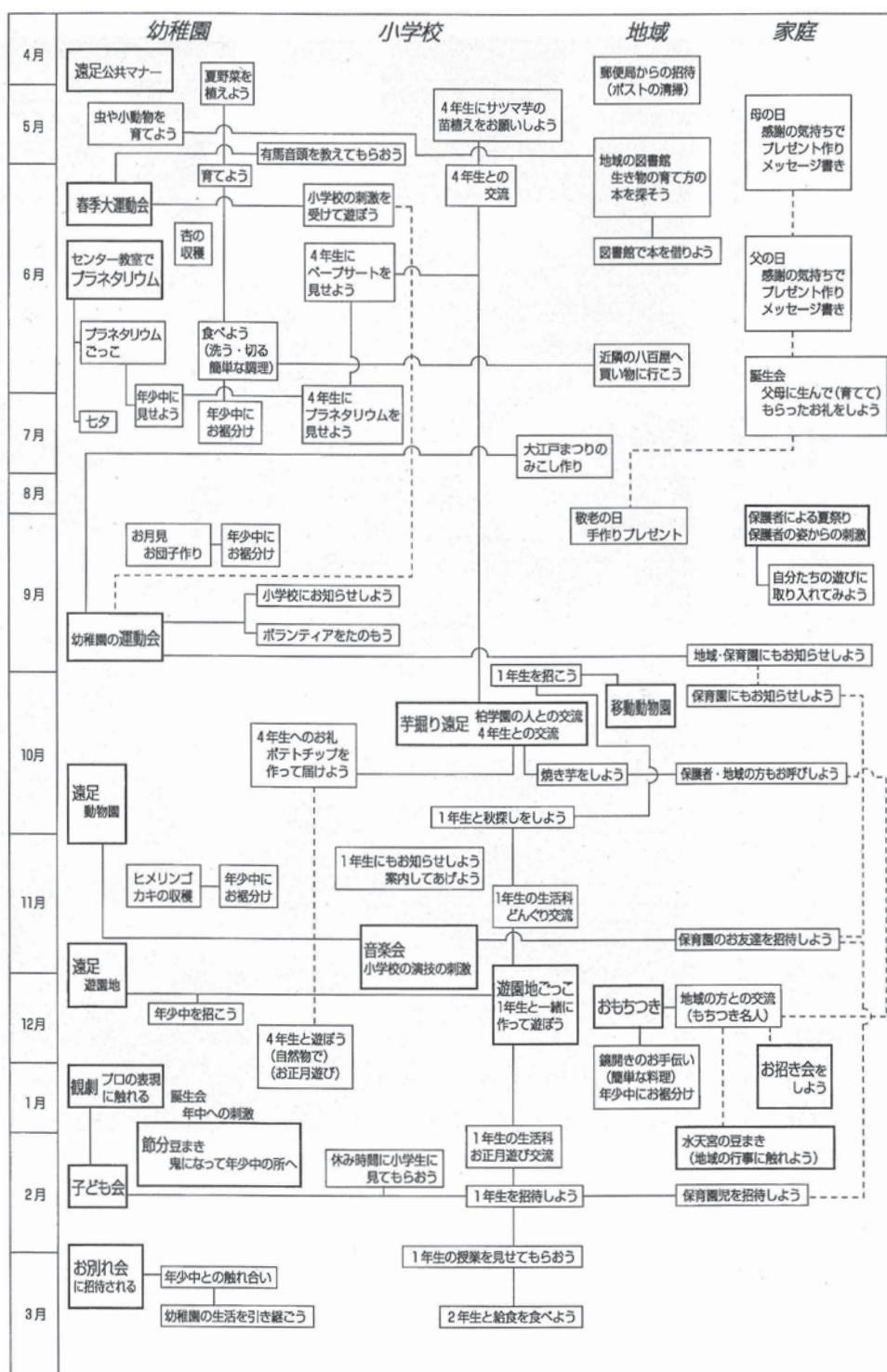
に継承したものと捉えることができる。

## 2. 幼・小連携と「預かり保育」のカリキュラム

カリキュラム編成の観点から見て影響が大きかったのは、幼・小連携教育といわれる「預かり保育」の開始である。幼稚園教育要領の第3章指導計画作成上の留意事項で、「幼稚園教育が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成」に務めること、また、「特に留意する事項」では、「教育課程に係る教育時間の終了後に行う教育活動」すなわち「預かり保育」を積極的に実施することが求められた。最終報告でも、幼・小連携について、「今後、生活科などを中心に小学校低学年における総合的な指導を一層推進するとともに、各教科等においても具体的な活動や体験を一層取り入れることにより、幼稚園における主体的な遊びを中心とした総合的な指導から小学校への一貫した流れができることが期待される」と説明され、「幼稚園の年長児後半から小学校1年生の1学期頃」までを幼小接続期としてそのカリキュラム開発が期待されることになった。

もうひとつの「預かり保育」とは、保護者の要請を受けて、幼稚園が正規的教育課程終了後に保育の機能を担うことで、最終報告では、「近年の女性の社会進出の拡大などを背景として、幼稚園の正規的教育時間終了後、希望する幼児を対象に幼稚園において引き続き教育を行う預り保育に対する要望は増大している」と説明された。「預かり保育の実施に当たっては、幼稚園と親が共に育てるという意識をもち、親が子育ての楽しさを味わい、家庭の教育力を高めていけるよう、家庭と密接な連携を図りながら進めていく必要がある」とされた。

この幼稚園教育要領以降、幼小接続教育と「預り保育」のカリキュラム開発が進行することになった。その一例、東京都有馬幼稚園は、1999（平成11）年度から2001年度までの3年間「幼稚園と小学校の連携を深めるための教育課程の開発」という主題で文部科学省の研究開発学校の委嘱を受け、図表3「5歳児の幼児と小学生たちとの交流活動の年間プラン」のように<sup>24</sup>、地域・家庭も視野に入れた広がりのあるものに仕上がっている。イベントではなく幼・小の9年間の連続性を考えて作成されたプロジェクト型の計画である。ただし、すべて教師が意図した計画だけでなく、「幼児や児童が生み出した活動や次の活動へのつながりも加えていくようにした」という。出会いの場「ありまフィールド」を活用して、学年ごとに年間活動プランが立てられている。「継続性をもって交流していくために長期的な計画を当て、5歳児が4年生に苗植えをお願いに行き、これをきっかけにそれぞれの活動（学習）の展開を図っていくことにした」という。ここから「4年生が休み時間に保育室に遊びに来てくれるなどの自発的な交流が見られるように」なり、「5歳児は、4年生の表現が刺激になり、ペープサートの遊びが始」まるなど、「自発的に生まれた活動」も出てきたという。小学生も幼稚園児も、この出会いによって「遊びや生活がより豊かに」なり、「相互の自発的な動きが実現できるように」、教師は「環境を整えたり、支援」したりするのである。「幼児の変容」として、「遊びの刺激を受け、自信をもって行動」するようになった。「自分から進んで人に関わろうとする」ようになったとあり、他方、小学生も、「思いやりの気持ちがはぐくまれる」



図表3 5歳児の幼児と小学生たちとの交流活動の年間プラン

「自ら学ぶ姿勢が身に付く」などの変容が見られたという報告である。

もう一つは、「預かり保育」のカリキュラム開発である。正規の教育課程外であるが、「預かり保育」をする以上、そのカリキュラム研究が必要であり、1999 年には、指定地域 13 市町村の研究集録が出された。図表 4「預かり保育の年間指導計画」と図表 5「日案例」（3 月 3 日、4・5 歳児）は、

月	4・5	6・7	8（夏休み中）	9・10・11・12	1・2・3
幼児の姿	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新入園児は自分の学級と異なる園や場で、生活することに不安を感じる。</li> <li>・家を恋しがったり、自由に動き回ったりする。</li> <li>・進級児は新しい友達と過ごすことに戸惑うが、慣れると新入園児に生活の仕方を教えてあげたり一緒に遊んだりする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・午後の生活に慣れてきて異年齢と一緒に遊ぶことを楽しむようになる。</li> <li>・午前中に楽しかった遊びやもっとしたい遊びの続きをするようになる。</li> <li>・暑くなるにつれ、体力を消耗しゴロリと横になる幼児が多くなる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・利用する幼児が減るので異年齢のかかわりが深まり親しさを増す。</li> <li>・朝から夕方までいるため一日を長く感じる幼児や、幼稚園で友達と遊べることを喜ぶ幼児がいる。</li> <li>・兄や姉と家庭の方で一緒に過ごしたい気持ちの強い幼児がいる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体を動かす遊びが多くなり、大胆な行動をするようになる。それに伴い、ぶつかる・転ぶなどのけがも増えてくる。</li> <li>・その日の体調によって、自分から準備をして午睡をする姿が見られる。</li> <li>・積極的に手伝い等をしようとする幼児が増える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分のしたい遊びにじっくりと取り組むようになる。</li> <li>・異年齢児の結び付きが強くなり遊びや生活の中で伝え合い教え合うことが多くなる。</li> <li>・外から帰った時や、おやつ前のうがい、手洗いを自分から、進んでしようとするようになる。</li> </ul>
予想される生活	○室内遊び ビデオを見る・折り紙・ままごと・ブロック・絵かき 積み木・段ボール遊び <div>平均台・マット遊び パズル・トランプ・かるた</div> しまう遊び・たこ作り こま作り・買いものごっこ				
	○戸外遊び 固定道具・三輪車・自転車・鬼遊び・砂場・ボール遊び しゃぼん玉遊び・水遊び プール遊び かけっこ・リレー サッカー・なわとび ドッチボール 午睡 せみとり・魚とり・ザリガニとり・すいか割り・お化け屋敷ごっこ 虫とり・木の实拾い・落ち葉拾い・やきいも たこあげ・一輪車・野球ごっこ ○園外保育・散歩（公園・神社・小学校の校庭及び周辺・周辺の小川など） ○買い物に行く ○おやつ作り・ゼリー……等——クレープ・クッキー……等——ホットケーキ・ケーキ……等——ぜんざい・ホットドッグ・草もち……等——				
環境の構成・援助・配慮（☆おやつ）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一人一人を温かく受け止め、安心感がもてるようにする。</li> <li>・異年齢・他の園での生活に抵抗がある幼児もいるので、コーナーを作るなど安定して過ごせる場を確保する。</li> <li>・眠くなった幼児や疲れの見える幼児は、午睡をしたり体を休ませたりできるようにする。特に夕方にかけた体調の変化には注意する。</li> <li>☆幼児に人気のあるおやつを用意し楽しみに待つようにする。そして楽しい語らいの時間になるような雰囲気を作る。</li> <li>☆おやつ後も歯をみがく習慣を付けるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・異年齢で仲良くしたり、教え合ったりして遊ぶ姿を大切に、見守っていく。</li> <li>・生活に慣れ危険な遊びをするので生活の仕方を繰り返し指導していく。</li> <li>・プール遊びが始まるので午睡の時間を多くとり保育者自身がリラックスして添い寝したり、静かな音楽を流したりする。</li> <li>☆麦茶は十分用意しておき幼児の状態や要求に応じて水分補給を行う。</li> <li>☆ヨーグルトなど口当たりのよいものと、よくかんで食べるおやつを組み合わせるなど与え方を工夫する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・風通しを良くしたり、涼しさを誘う環境を整える。</li> <li>・一日中の生活となるので生活のリズムに配慮する。</li> <li>・せみとりなどこの時期にしか経験できない遊びを十分に楽しむようにする。</li> <li>・弁当が腐りやすいので冷蔵庫に入れるなど気を付けて保管する。</li> <li>・年長児に教わったり年少児の面倒をみたりする中で育まれた親しみの気持ちを大切に、よい関係が育つよう援助していく。</li> <li>☆幼児の要求で冷菓子やジュース類が多くならないように気を付ける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・行事があった日は体を休めるように促す。</li> <li>・疲れて眠ってしまう幼児には汗をかいていないか確認し、その日の気温によってバスタオルのかけ具合など調節する。</li> <li>・スリルを求めて大胆な遊びをするようになるので、安全面に十分気を付ける。</li> <li>・自分たちで遊びやおやつの準備ができるように台や容器など扱いやすいものを使用し衛生面などにも配慮する。</li> <li>☆親しまれている菓子や夕食にさしかえない程度のおやつを与える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・室内で過ごしがちなになるので外に出て体を動かすことを心がける。</li> <li>・風邪が流行する時期なので一人一人の健康状態には気を配り手洗いやうがいを励行する。</li> <li>・進んで手伝いをする姿を認めなかよし組の一員として自分も役立つ存在である喜びを味わうようにする。</li> <li>・年長児はできるだけ午睡をせずに過ごせるよう、徐々に就学に向けて準備を整えていく。</li> <li>☆自分の好きな物を選んだり、買った物を分け合ったり食べたりする。</li> </ul>
家庭との連携	<ul style="list-style-type: none"> <li>・寂しい思いや不安な思いをしないよう、家での様子を尋ねたり園での様子を具体的に伝えたりしていく。</li> <li>・預かりカードや連絡事項など必要に応じてたよりを配布する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・午後の生活の様子を伝え安心してもらう。</li> <li>・汗がでたり、水遊びで着替えることが多くなるので家から服を持ってきてもらう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・夏ならではの生活や体験、地域の人々との触れ合いの大切さを知らせていく。</li> <li>・弁当にはよく火を通したものの、腐りにくいものを入れてもらうよう伝える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・迎えにきた保護者同士が親しくつながっていくよう配慮していく。</li> <li>・家庭でもうがい・手洗いの習慣が身に付くよう協力をお願いする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一年間の成長の様子などを伝えていく。</li> <li>・家庭でもうがい・手洗いの励行をお願いし、風邪をひかないように伝える。</li> </ul>

図表 4 預かり保育の年間指導計画（4・5 歳児）



岡山県金光町のカリキュラムである<sup>25</sup>。金光町は3つの幼稚園があるが、預かり保育推進委員会を発足させて、合同で「預かり保育」を進めている。3幼稚園の希望者をA幼稚園に集めて、合同で運営する仕方がとられている。カリキュラムは、「基本的には、教育課程に基づいての指導と連携」

ねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 異年齢児と一緒に好きな遊びを考え、一緒に遊んだり生活するなかで一人一人のよさが十分発揮できるようにする。</li> <li>○ 自分の好きなおやつを自分で選んで買ったり、店の人との触れ合いを楽しんだりする。</li> </ul>	
内 容	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 好きな遊びを考え、ルールを守って遊ぶ。</li> <li>○ 気の合った友達に自分の思いを話したり、認め合ったりする。</li> <li>○ 店へ行って自分でおやつを買ったり、店の人との触れ合いを楽しんだりする。</li> </ul>	
時 刻	生 活 の 流 れ	環境の構成と教師の援助
11:30	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ なかよし組へ行く。</li> <li>・ 預かりカードを出す。</li> <li>・ 持ち物の始末をする。</li> <li>・ 休息をする。</li> <li>・ 手洗い、うがいをする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 一人一人の幼児を「おかえり」と言って笑顔で温かく迎え、幼児の話し掛けに応じながら家庭的な雰囲気で過ごせるようにする。</li> <li>・ 手洗い、うがいが丁寧にできるよう一人一人の様子に気を配るようにする。</li> <li>・ 楽しく食事ができるように家庭的な温かい雰囲気を作るようにする。</li> <li>・ 一人一人の「こうしたい。」「～ができるようになりたい。」という願いを保育者は受け止めながら、認めたり励ましたりしていく。</li> <li>・ 年少児や年長児の触れ合っている場面を見守り支えていくようにする。</li> <li>・ 幼児の思いが実現できるよう遊びの場や材料の出し方を工夫する。</li> <li>・ 自分で片付けを進んでしている幼児を認めながら、みんなで協力して最後まで片付けられるよう励ます。</li> <li>・ 『右側を歩く、飛び出さない、正しく横断する』など安全に気を付けて目的地に歩いて行かれるよう必要に応じて指導する。</li> <li>・ 持っているお金で自分が買いたい物が買えているかを一人一人の幼児と一緒に確かめるようにする。</li> </ul>
12:00	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 弁当を食べる。</li> <li>・ 準備、当番、後片付け、歯みがきをする。</li> <li>・ 絵本を見る。</li> </ul>	
13:00	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 好きな遊びをする。</li> <li>・ 室内で遊ぶ。 (ブロック・折り紙・ぬり絵など)</li> <li>・ 戸外で遊ぶ。 (固定遊具・自転車・サッカー・なわとび・鬼ごっこなど)</li> </ul>	
13:50	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 片付けをする。</li> </ul>	
14:00	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 買物に行く。</li> <li>・ 順番に並んで行く。</li> <li>・ 店の人にあいさつをする。</li> <li>・ 順番にお金を持っておやつを買う。</li> <li>・ 店の人にお礼とあいさつをして帰る。</li> <li>○ 手洗い、うがいをする。</li> </ul>	
15:00	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ おやつを食べる。</li> <li>・ 準備、当番、後片付け、歯みがきをする。</li> <li>○ 紙芝居を見る。</li> </ul>	
15:30	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 降園準備をする。</li> <li>《迎えがあれば順次降園する、(15:00～17:30)》</li> <li>○ 好きな遊びをする。</li> <li>・ 戸外で遊ぶ。 (固定遊具・高 鬼・ドッジボールなど)</li> <li>・ 室内で遊ぶ。(ブロック・折り紙・ぬり絵・オセロ・ごっこ遊び・パズル・トランプ・ままごと製作・こま回しなど)</li> </ul>	
17:30	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 降園する。</li> </ul>	
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 暖かい日には、園庭にごさを敷いて楽しい雰囲気でおやつが食べられるような工夫をする。</li> <li>・ 買ってきたおやつは、時にはおやつを交換したり、分け合ったりすることも認めるようにする。</li> <li>・ いつ迎えに來られてもいいように前もって降園準備ができているか確認するようにする。</li> <li>・ 幼児が思い思いに好きな遊びができるように必要な遊具や用具・材料を用意しておく。</li> <li>・ 戸外遊びでは、遊具などの安全面に配慮する。</li> <li>・ 保護者にその日の様子を伝えながら、連携を密にし、信頼関係を大切にする。</li> </ul>

図表5 日案例（3月3日、4・5歳児）

をとっているとのことであるが、それ以上に、「家庭生活への連続性」を重視し、「幼児に負担をかけない活動を、ゆったりとした生活時間で、家庭的な雰囲気をつくることを大切に考え」、「家庭で経験する内容を積極的に取り入れるようにして、できる限り子供たちに多様な経験をさせるようにしている」という。「工夫した保育内容の具体例」を見ると、おやつ作り、買い物、園外保育や散歩、季節に応じた活動（プール遊び、スイカ割り、お化け屋敷ごっこ等）などが見られる。さらにアットホームな環境作りにも配慮して、「通常の保育終了後、預かり保育室（なかよし組）に入ってきたら、家庭に帰った気分が味わえるように、一人一人に『お帰りなさい。』と言って、お母さんのように温かく迎えるようにする。」あるいは、「幼児のあるがまを受け止めるようにする。」「幼児との信頼関係を図り、安定して生活できるようにする」等々の努力が見られる。とにかく「ゆったりとした生活時間、家庭的な雰囲気」を作って、「幼児の心身への配慮」をきめ細かくしているという。さらに家庭への働きかけも重視し、幼児期の親に対して、「お迎えの際は、明るい笑顔でお迎えいただき、しっかりスキンシップをしてあげてください。」「家庭でしっかりお子さんと遊んであげていただき、親子の触れ合いを十分保つようにしていただきたい」と求めている。また、「預かり保育中の様子を保護者に」知らせたり、「預かりカード」や「緊急時の連絡票」を利用したりして、「家庭との連携を密に」しているという。こうした「預かり保育」の実践に対して、子ども達からは、「家に帰っても友だちが近所」に居ないし、「遊ぶ場所もないので、預かり保育で大勢で友だちと遊べるので、とても楽しい」という感想がある。親からも、「安心して預けられる施設」、あるいは親同士の「情報交換の場」になっているという反応があり、好評であるという。そして、「研究を進めていくうちに、必ずしも就労者のためだけではなく、幼児の人格をより豊かにしていくために良い環境の中で、それを保障していくという意味合いも大事」にすべきことが認識されるようになり、「遊び場の減少、室内遊びの増加、遊び友達の減少等、幼児の育ちを考えると、幼稚園がそれを補っていく場としても今後の預かり保育を見直しながら研究を進めていかなければならない」と報告された。

以上、この時期のモデル・カリキュラムとして、幼小接続期及び「預かり保育」のカリキュラム開発について検討したが、このほか、3歳児からの3年保育、道徳性の芽生え、思考力の芽生え、そしてかわり合う力の育成を目指すカリキュラム開発などが見られる。それらはいずれも幼児の生活と遊びを通して、教師による環境構成という仕方でのカリキュラム開発で、全体として幼稚園教育要領の趣旨がかなり浸透してきたことが窺われる。次の改訂である2008（平成20）年以後、さらにそのカリキュラム開発が進化するので、次章で検討したい。

### 第3章 2008（平成20）年改訂「幼稚園教育要領」—幼小の学びの連続性—

#### 1. 家庭・幼稚園・小学校の連続性

2006（平成18）年12月22日法律第120号により教育基本法が改正され、同第11条で、「幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであることにかんがみ、国及び地方公

共同体は、幼児の健やかな成長に資する良好な環境の整備その他適当な方法によって、その振興につとめなければならない」と規定された。これを受けて学校教育法が、2007（平成 19）年 6 月 27 日に一部改正され、その第 22 条で、「幼稚園は、義務教育及びその後の教育の基礎を培うものとして、幼児を保育し、幼児の健やかな成長のために適当な環境を与えて、その心身の発達を助長することを目的とする。」と定められた。この教育目的のもとに、第 23 条では、幼稚園の目標 5 項目が規定されたが、これは 5 領域「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」と対応している。旧学校教育法の目標に比較して、第 2 項で、「協同の精神並びに規範意識の芽生え」、第 3 項で、「生命」と「思考力の芽生え」、第 4 項で「相手の話を理解しようとする態度」、そして第 5 項で「豊かな感性と表現力の芽生え」という項目が新たに付加された。道徳的な規範意識、生命及び他の人を尊重する精神、そして思考力と表現力という、いずれも時代の課題が挿入されたことがわかる。なお、従来は、学校教育法と幼稚園教育要領で 2 重に目標が規定されていたのであるが、今回は、幼稚園教育要領で目標の節は削除された。

さて、愛国心の論議があった新教育基本法の制定と学校教育法の改正を経て、2008（平成 20）年 1 月 17 日、中央教育審議会は「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」を答申した<sup>26</sup>。「改善の基本方針」では、「近年の子どもの育ちの変化や社会の変化に対応し、発達や学びの連続性及び幼稚園での生活と家庭などでの生活の連続性を確保し、計画的に環境を構成することを通じて、幼児の健やかな成長を促す」とされ、「連続性」がキーワードになっている。要するに、家庭・幼稚園・小学校を通して、発達・学びと生活の連続性を高めたいという趣旨である。「改善の具体的事項」は、1. 発達や学びの連続性、2. 幼稚園と家庭の生活の連続性、3. 子育ての支援と預かり保育の充実である。

この改善方針に沿って、幼稚園教育要領は、同年 3 月 28 日文部科学省告示第 174 号により改訂された。まず総則の「第 1 幼稚園教育の基本」では、教育基本法にのっとり「幼児期における教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なもの」であることが明示され、「第 2 教育課程の編成」では、「幼稚園生活を通して、生きる力の基礎を育成する」という、学習指導要領全体の理念である「生きる力」の育成の一環に位置づけられた。かつ「義務教育及びその後の教育の基礎を培う」として、幼稚園は小・中・高など上位校へつながる基礎を育成する学校であることも明示された。教育制度上、当然の位置づけではあるが、前回は、「生涯にわたる人間形成の基礎」という位置づけによって幼児教育の固有性が記述されていたが、今回は、学校教育の枠組みにこれまで以上に組み込まれ、その「基礎を培う」ものと確定された。ただし、その教育方針は、前回と変わらず、「幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行う」ことが基本とされている。「特に、自我が芽ばえ、他者の存在を意識し、自己を抑制しようとする気持ちが生まれる幼児期の発達の特性」をふまえて、「長期的な視野をもって充実した生活が展開できるように配慮」することと要請されている。なお教育週数は「39 週を下ってはならないこと」、一日の教育時間は「4 時間を標準とすること」に変化はない。注目すべきは、「預かり保育」が前回は「特に留意する事項」の末尾項目に過ぎな

かったのに、今回は総則に明示されたことである。

第2章の「ねらい及び内容」では、5領域の「ねらい」と「内容」そして「内容の取扱い」が規定されている。改訂を中心に見ると、領域「健康」では、「内容」(5)「先生や友達と食べることを楽しむ」が入り、その取扱いでは、(4)「健康な心と体を育てるためには食育を通じ望ましい食習慣の形成が大切である」という説明で、健康な生活のための食育重視の線が入った。これは小・中学校でも栄養教諭が新設されるなど、義務教育と同一方針が取られたものである。また「内容」(8)「幼稚園における生活の仕方を知り、自分たちで生活の場を整えながら見通しをもって行動する」が入り、自立的に行動する「気持ち」を育成しようとしたものである<sup>27</sup>。「内容取扱い」(1)「特に、十分に体を動かす気持ちよさを体験し、自ら体を動かそうとする意欲が育つようにする。」、また(5)「基本的な生活習慣の形成の当たっては、家庭での生活経験に配慮し」とあり、近年の運動能力の低下及び家庭での教育力の低下への対応が見られる。

領域「人間関係」では、「ねらい」(2)身近な人と親しみ、かかわりを深め、愛情や信頼感をもつ」が入れられたが、対人関係が苦手になっている現状への対応である。「内容」(4)「いろいろな遊びを楽しみながら」、(5)友だちと楽しく活動する中で、共通の目的を見出し、工夫したり、協力したりなどする」、そして「内容の取扱い」(3)で「幼児が互いにかかわりを深め、協同して遊ぶようになるため、自ら行動する力を育てるようにするとともに、他の幼児と試行錯誤しながら活動を展開する楽しさや共通の目的が実現する喜びを味わうことができるようにすること」が入れられた。これについては「21世紀スキル」でも求められているように、協同作業によって「つくりあげていく過程が」重視されている。また(2)では、「特に、集団の生活の中で、幼児が自己を発揮し、教師や他の幼児に認められる体験をし、自信をもって行動できるようにすること」とあり、これは「自分に自信がある子どもが国際的に見て少ない」という統計を踏まえた改善策で、解説では、「自信をもつためには、幼児が教師や友達とのかかわりの中で、自分らしさを発揮し、自分の言動が認められたと感じることが大切である」と説明されている。(5)「集団の生活を通して、幼児が人とのかかわりを深め、規範意識の芽生えが培われることを考慮し、幼児が教師との信頼関係に支えられて自己を発揮する中で、互いに思いを主張し、折り合いを付ける体験をし、きまりの必要性などに気付き、自分の気持ちを調整する力が育つようにすること」が付加された。これも「近年、子どもの規範意識の希薄化」への対応で、上から教え込むのではなく、「教師との信頼関係にささえられて自己発揮し」、「自分の行動を認められていると感じるからこそ、決まりを守ろうとする」規範意識が育つこと、また、他の人と対立したり折り合いをつけたりすることで、「自分の気持ちを調整する力」が育成されると説明されている。(6)「高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人とのふれあい」、「生活を通して親や祖父母などの家族の愛情に気付き、家族を大切にしようとする気持ちが育つようにすること」が付加され、ふれあいを「親だけでなく『親や祖父母などの家族』」に広げようとしている。

さらに他の3領域を見ると領域「環境」では、「内容の取扱い」(1)で、「特に、他の幼児の考え



などに触れ、新しい考えを生み出す喜びや楽しさを味わい、自ら考えようとする気持ちが育つようにすること」が付加され、「思考力の芽生えについての指導の在り方を充実」させようとしている。領域「言葉」では、「内容」(2)「したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりなどしたことを自分なりに言葉で表現する」、そして「内容の取扱い」(2)「幼児が自分の思いを言葉で伝えるとともに、教師や他の幼児などの話を興味をもって注意して聞くことを通して次第に話を理解するようになっていき、言葉による伝え合いができるようにすること」が付加された。これは小中高で言語活動が特段に重視されたことに繋がるもので、幼稚園段階でも、「言葉による伝え合いができるようになるためには、思いを言葉で伝えるとともに」、「幼児自らが相手の話に興味や関心をもち内容を理解したいという気持ち」になることが必要で、そのために教師は、「話の内容や話を聞く場、視覚による素材などの工夫」をすることが求められた。領域「表現」では、「内容」(1)「生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりなどして楽しむ」ことが重視され、また「内容取扱い」(3)では、「他の幼児の表現に触れられるように配慮したりし、表現する過程を大切に自己表現を楽しめるようにすること」と付加された。「表現で大切なことは、自分なりの表現であることであり、できあがりの結果だけでなく、表現する過程自体を幼児が楽しめるように工夫することが大切」であると解説されている<sup>28</sup>。

第3「指導計画及び教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動などの留意事項」では、第1「指導計画の作成に当たっての留意事項」で、その「1 一般的な留意事項」を見ると、(3)「認定こども園である幼稚園については、幼稚園入園前の当該こども園における生活経験に配慮すること」が付加され、既に、3歳児以前からのこども園での生活経験のある子どもに対しては、その「経験を配慮した指導計画」を作成することが求められた。(4)「幼児が様々な人やものとのかわりを通して、多様な経験をし、心身の調和のとれた発達を促すようにしていくこと。その際、心が動かされる体験が次の活動を生み出すことを考慮し、一つ一つの体験が相互に結び付き、幼稚園生活が充実するようにすること」が付加され、「調和のとれた発達をしていくためには、偏りのない多様な体験が必要である」こと、また、「幼児の視点から関連して体験がつながり、意味ある体験をしていくよう援助することが重要である」と解説されている。(8)「家庭との連携に当たっては、保護者との情報交換の機会を設けたり、保護者と幼児との活動の機会を設けたりすることを通じて、保護者の幼児期の教育に関する理解が深まるよう配慮すること」が付加され、様々な機会を設けて「保護者との信頼関係」を構築することが説かれている。「2 特に留意する事項」では、学校教育法改正で養護学校が特別支援学校となったことを受け、関係機関と連携しつつ、「個々の幼児の障害状況などに応じた」指導を計画することが求められた。

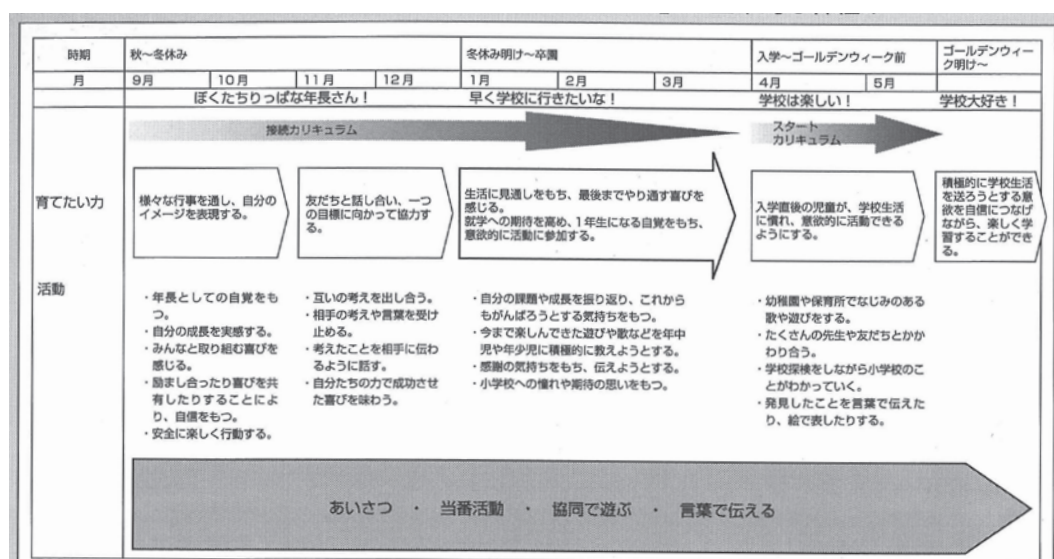
そして幼・小連携と「預かり保育」について、(5)「幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続のため、幼児と児童の交流の機会を設けたり、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会を設けたりするなど、連携を図るようにすること」が明文化された。前回は、「一般的な留意事項」で「幼稚園教育が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに配慮し」という程度の要請で、

多くの幼稚園と小学校とで「交流の機会」が設定され、有意義なプランも出されていたが、今回は「教師の意見交換や合同の研究の機会を通して、幼稚園と小学校の教員が、互いの教育内容や指導方法を相互によく理解しあうようになることが目的である」と中教審答申及び解説では説明されている。幼小接続のカリキュラム開発までは明文化されていないが、この種の研究が以後本格化することになる。「特に留意すべき事項」の「第2 教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動などの留意事項」は、独立した柱として設定され、重要視されていることが窺われる。その「1 地域の実態や保護者の要請により、教育課程に係る教育時間の終了後等に希望する者を対象に行う教育活動については、幼児の心身の負担に配慮すること」が付加され、「預かり保育」の結果、「長時間幼稚園で過ごすようになることを踏まえ、幼児の心身の負担に配慮」することとして、5項目が新たに規定され、家庭・地域と連携をはかりつつも、基本は幼稚園の教師の責任と指導にあること、及び教育課程外といっても幼稚園教育の一環にあることが注意されている。最後に、幼稚園が地域の幼児教育センターとして、子育て支援の役割を果たすことも期待されている。これは、すでに前回の要領でも打ち出されていたが、一層求められることになった。

以上、改訂を中心に検討したが、全体としては前回の幼稚園教育要領の基本的考え方を継承したもので、「幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行う」ことが基本とされている。答申が求めたように、「集団生活を通して」「自我の芽生え」「規範意識の芽生え」「自立心の育成」などによる「生活の基盤」作りと、「思考力の芽生え」など学力形成につながる「環境」作りとによって、「生きる力」に不可欠な資質が育成され、上位校の「教育の基礎を培う」ことが期待された改訂であった。

## 2 幼・保・小接続カリキュラムとスタートカリキュラム

それでは、この新幼稚園教育要領の下、どのようなカリキュラム開発が進行しているのだろうか。答申の「改善の基本方針」を受けて、「幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続」のカリキュラム開発が進められ、さらには幼稚園・保育所・小学校の三者の連携への発展が課題とされている。図表6「合同研修による教員の相互理解を生かした幼小連携の取組」は滋賀県のとらひめ幼稚園・小学校によるカリキュラム開発であるが、研究の仮説として、「幼稚園と小学校が連携を密にし、『伝え合う力』をはぐくむ交流活動や教育課程の編成・指導方法を工夫していけば、幼児が安心・自信・あこがれの気持ちで小学校に入学し、幼小の円滑な接続が図られるであろう」と掲げている。この滋賀県虎姫中学校区は30年以上にわたって幼保小中の連携を続けている地域で、「保育所、幼稚園、小学校、中学校が保育・授業を公開し、町内すべての教員が参観する実践交流会を年3回開催」しているという。このような蓄積の上に、「本年3月には、小学校教員が幼稚園で1日体験保育を行い」、「5月には幼稚園教員が小学校で1日体験授業を行い、それぞれの教育や子どもの様子について理解を深め」、さらには、「幼・小教員が幼稚園教育要領と、小学校学習指導要領を読み合い、それぞれの内容を確認」し合ったという。そして、「幼稚園3歳児から小学校6年までを見通した『伝え合う力をはぐくむカリキュラム』を編成し」、「幼児・児童に付けたい『話す力』



図表6 合同研修による教員の相互理解を生かした幼小連携の取組

『聞く力』『話し合う力』を段階的に育成することをねらいとした」という。とらひめ幼稚園では、掲載のカリキュラムを作成し、「遊びや体験の中で、幼児が自分の感動や思い、考えを伝えたいような環境を工夫し、自分の言葉で表現できるように援助を行ってきた」という。

カリキュラム（図表7）を詳細に見ると、5歳児の1年を5期に分けて、子どもの姿、ねらい、内容、そして教師が対応すべき環境構成と援助が詳細に記述されている。内容の欄を追うと、「挨拶をする」、「自分の思いを伝えたり、友達の思いを聞いたりする。」「人の話に興味を持ち注意して聞く。」「考えたこと感じたことを人にわかるように話す。」「考えたことをわかるように話し、言葉をかかわす喜びを味わう。」「思ったことや考えたことを豊かに表現する。」というように滑らかな順次性をもって計画されていることがわかる。これに沿って、「あのねタイム（話し合いの場）」が進められ、「5年生との交流 “一緒に田植え”」、「1年生が幼稚園で遊ぶ」、「中学生との交流 “お兄ちゃんお姉ちゃん先生”」、「小学校の運動会に参加」、「5年生とおにぎりパーティ」、「1年生との交流 “秋見つけ”」、「1年生との交流 “お店やさんごっこ”」、「ウサギ登板のやり方や楽しさなどを4歳児に伝える」、「1年生との交流、1日入学・学校探検」、「お別れ会」などが計画されている。そしてそれを支える「環境構成」と「援助」の項目があり、「あのねタイム」では、同じ子に偏らないようにし、みんなの思いを聞けるようにする」など丁寧な準備と援助が盛り込まれている。これによって、「様々な体験を通してきまりを守ることの大切さに気付かせ」ようとしている。ねらいは、「友だちと考えを出し合ったり、協力しあったりしながらかわりを深める」、「文字や記号・数などを使って伝える楽しさを味わう」、「成長の喜びを感じ、入学の喜びや期待をもって生活する」ということである。一方、小学校では、生活科と国語科の総合的な指導によってスタートカリキュラムを編成しているという。『小学校学習指導要領解説 生活編』で、「4月最初の単元では、学校を探検する



	1 期		2 期		3 期		4 期		5 期		
	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
子どもの姿	・年長になった喜びを感じ「見て」「できた」と自分のしていることを教師にアピールする。 ・友達が進んでいる姿を見つけて自分も一緒にやろうとする。 ・年下の友達を気にかけて、かわって遊ぶ。		・友達とかかわりが広がり、協同する遊びが盛んになり、イメージを共有して遊ぶが、思いの違いからトラブルになることがある。		・友達同士の力関係や遊びの中で、思いの違いからトラブルが多くなり、自分の思いを教師に訴えてくる。 ・運動会の取組の中で友達ががんばっている姿に気づき、自分もがんばろうとする。		・木の葉や木の実を集めたり、遊びに取り入れたりして、感じたことや発見したことを友達と伝え合ったりする。		・ゲームのやり方や集団遊びのルールを友達と教え合ったり考えたりして楽しむ。 ・もうすぐ就学という自覚が生まれ、文字や数などに関心が強くなり遊びの中に取り入れている。 ・発表会で自分の役割を決め、いやなことがあっても友達と協力したり相談したりして遊びを続けることができる。		
ねらい	・年長児になった喜びを感じ、自分の好きな遊びに取り組み中で友達とかかわる。		・気の合う友達と思いを出し合い、いっしょに遊ぶ楽しさを味わう。		・気の合う友達と共通のイメージや目的をもち、互いに思いを出し合って遊びを進める。		・共通の目的をもって、イメージや考えを出し合いながら、相手の気持ちを受け入れ、相談したり、協力したりする。 ・思いを伝え合いながら、自分が役に立つ喜びを感じ自信をもつ。		・友達と考えを出し合ったり、協力し合ったりしながらかわり方を深める。 ・文字や記号・数などを使って伝える楽しさを味わう。 ・成長の喜びを感じ、入学への喜びや期待をもって生活する。		
内容	<div style="display: flex; flex-wrap: wrap;"> <div style="width: 33%;">           ・親しみをもって挨拶をする            ・自分の知っていることや気が付いたことを伝えようとする。         </div> <div style="width: 33%;">           自分の思いを伝えたり、友達の思いを聞いたりする。         </div> <div style="width: 33%;">           人の話に興味をもち注意して聞く。         </div> <div style="width: 33%;">           考えたことや感じたことを人にわかるように話す。         </div> <div style="width: 33%;">           考えたことをわかにように話し、言葉をかわす喜びを味わう。         </div> <div style="width: 33%;">           思ったことや考えたことを豊かに表現する。         </div> </div> <div style="margin-top: 10px;"> <p>あねタイム（話し合いの場）</p> <p>年少児に優しく接しようとする → 4歳児とさつまいもの栽培活動をする → 5年生と交流「一緒に田植え」 → 1年生が幼稚園で遊ぶ → 中学生との交流「お兄ちゃんお姉ちゃん先生」 → 小学校の運動会に参加 → 5年生とおにぎりパーティ → 1年生との交流「秋見つけ」 → 1年生との交流「お店屋さんごっこ」 → さつまいも収穫後一緒にクッキング → ウサギ当番のやり方や楽しさを4歳児に伝える → お別れ会 → 1年生との交流 1日入学・学校探検</p> </div>										
○環境構成 ★援助	<p>○「あ・さ・お・こ・し」の挨拶カードを活用し、元氣よく挨拶ができるように教師がモデルになる。</p> <p>○互いに話手の方を見て話せるような場をつくる。</p> <p>○身の回りの自然環境を園生活に取り入れる。</p> <p>★一人一人の気持ちを受けとめながら、互いの思いに気付き合えるように仲立ちする。</p> <p>★幼児の言葉を丁寧に聞き、相手の気持ちを気付けようとする。</p> <p>★「あねタイム」では、同じ子に頼らないようにし、みんなの思いを聞けるようにする。</p> <p>○相手の様子が見やすい場の広さや向かい合って遊べる場などの環境構成を図る。</p> <p>★異年齢の交流の場を作る。</p> <p>★友達の中で思いが通じ合ったり、言葉を補ったり相手の思いを伝えたりする。</p> <p>★一人一人の表現を受けとめ、安心して素直に思いが伝えられる「あねタイム」にする。</p> <p>○子どもの興味、関心が高まるように、視覚教材を取り入れる。</p> <p>★一人一人のがんばりや感じたこと、考えたことを伝える場や機会を設ける。</p> <p>★困った場面でも何とか子どもとのかかわりを通して乗り越えられるように支えたり、助言したりする。</p> <p>★トラブルがあったときは、解決を急がず、子どもの気持ちを受け入れ、共感しながら一緒に方法を考える。</p> <p>★うまく相手に伝えられないときは、遊びの中に入りながら言葉を引き出せるような援助をする。</p> <p>★自分の役割を果たそうとしている姿をとらえ、友達同士で認め合える場をつくる。</p> <p>★個々の子どものイメージや発見したことが周りに子に伝わるように仲立ちする。</p> <p>★友達の気持ちに気付いたり、自分の思いを伝えたりしていけるような言葉かけをする。</p> <p>★安心して、自分の思いが主張できるように気持ちを支える。</p> <p>○連絡や伝言、絵本や手紙などの文字や記号がもつ機能や役割に対する関心と理解が自然な形で育つように環境の中に入れる。</p> <p>○異年齢児と共に活動する時間を多くつくり、自分たちのしてきたことを伝えたり、心を通わせたりして通じ合える場を設ける。</p> <p>★幼児が互いのよさを認め合い、自分たちで考えた、意見をしたりして、一緒に生活する楽しさを体験できるようにする。</p> <p>★交流の中で小学校への期待感がもてようとする。</p> <p>★自信と誇りをもって卒業できるように自分の成長を振り返り、いろいろなことができたようになったことを言葉にして伝える。</p> <p>★様々な体験を通してきまりを守るとの大切さに気付かせる。</p>										

図表7 『接続カリキュラム』と『スタートカリキュラム』の基本的な枠組み

生活科の学習活動を中核として、国語科、音楽科、図画工作科などの内容を合科的に扱い大きな単元を構成することが考えられる」。「大単元から徐々に各教科に分化していくスタートカリキュラムの編成なども効果的である」と奨励されているので、これを受けたカリキュラムづくりである<sup>29</sup>。

次に、小学校カリキュラムについては、青森県青森市立三内西小学校の図表8「スタートカリキュラム『学校は楽しい』」の報告が目玉される。5歳児9月から「接続カリキュラム」が開始され、小学校1年生のゴールデン開けまで、「育てたい力」が順次性をもって配列されている。それは「様々な行事を通し、自分のイメージを表現する」、「友だちと話し合い、一つの目標に向かって協力する」、「生活に見通しをもち、最後までやり通す喜びを感じる。就学への期待を高め、1年生になる自覚をもち、意欲的に活動に参加する」、「入学直後の児童が、学校生活に慣れ、意欲的に活動できるようにする」、「積極的に学校生活を送ろうとする意欲を自信につなげながら、楽しく学習することができる」というもので、活動内容も「自分の課題や成長を振り返り、これからがんばろうとする気持ちをもつ。今まで楽しんできた遊びや歌などを年中児や年少児に積極的に教えようとする。感謝の気持ちをもち、伝えようとする。小学校への憧れや期待の思いをもつ」などが見られる。「あいさつ・当番活動・協同で学ぶ・言葉で伝える」ことが4大活動として重視され、これ



区分	曜日	9 (月)	10 (月)	11 (水)	12 (木)	13 (金)	土・日
朝の時間	8:10 ～ 8:30	10:00～10:35 入学式	健康観察	健康観察 元気にあいさつ 日直当番の仕事	健康観察 元気にあいさつ	健康観察 元気にあいさつ	
1	8:35 ～ 9:20	10:55～ 写真撮影 11:15～ 学級活動 ・学校の名前 ・校長先生の名前 ・担任の先生の名前 ・保健室の先生の名前 を覚えよう ・自分の座席はどこ ・元氣にお返事 「はい、～です」 12:00 下校 ※7点セット ①筆箱 (Bか2B鉛筆5本、消しゴム) ②下敷き ③連絡帳(連絡袋) ④ハンカチ ⑤ティッシュ ⑥自由帳 ⑦黄色い安全帽子	なかよしタイム 学年みんな集まれ 歌(どきどきさん一年生) 音楽1	なかよしタイム 名簿順に並ぼう！ 体ほぐしの運動 歩く・走る・止まる 体育1	なかよしタイム お話読んで (食べ物のお話) 国語1	なかよしタイム お話読んで (交通安全のお話) 国語1	
2	9:25 ～ 10:10		学校探検① 生活1 トイレはどこ？ 机、ロッカーを 上手に使う	学校探検②③生活2 ・長い廊下だよ ・階段をあがると 何があるのかな ・靴箱の使い方 ・保健室、職員室や 図書室 だれがいるの どうやって入るの？	学校探検④生活1 ・給食室探検 おおきな鍋で 作っているよ いいにおいだね ・給食当番の仕事 ・給食のもらい方 ・箸、おしぼり、ナプキン ・さあ食べよう 学活1	交通安全教室 1 2年生と信号を渡ろう 黄色い安全帽をかぶって	
3	10:30 ～ 11:15		安全に帰ろう！ 学級活動1 ・沢部方面(赤コース) ・よつば方面(青コース) ・丸山方面(緑コース) ・児童館(黄色コース) 11:30 下校		見つけたものは、 「はい、～です」 給食指導	すうじ 1、2 (ノートに書く) ・算数セット	
4	11:20 ～ 12:05			11:30 下校		見つけたものは、 「春」(国語の本) 給食指導	
5	13:45 ～ 14:30		下校は ボランティアの協力も得る 1～2週目は 少人数加配等の教員も加わる		「給食はどうでしたか」 「おいしかったです」	交通安全教室 2 自転車乗り方を知ろ う(ビデオ)	
		1 学校行事 2 学校活動	1 音楽 2 生活 3 学級活動	1 体育 2 生活 3 生活	1 国語 2 生活 3 学級活動 4 国語(2/3) 5 国語	1 国語 2 学校行事 3 算数 4 国語(2/3) 5 学級活動	

図表8 スタートカリキュラム「学校は楽しい」

らのカリキュラムを通じて、「育てたい力」をつけるという計画である。

小学校のスタートカリキュラムはゴールデンウィーク明けまで計画されているが、図表8「スタートカリキュラム 学校は楽しい『ねらい：なかよしタイムを楽しみにする』」は入学直後の第1週のもので、「なかよしタイム」と「学校探検」を中心にカリキュラムが組まれて常識的な内容であるが、「実際の子どもたちの様子や評価などから、内容を組み替えたり、繰り返したり、場合によっては切り上げたりなど、柔軟な活用が必要ではないか」という課題が生じた」という。前年度にうまくいったカリキュラムでも、教育は鮮度がすぐに落ちるので、その年度の児童生徒の反応を見て、当然改善の企画が必要になるはずである。それでも対応できないことがあるのが教育実践の常であろう。その改善の企画は、やはり接続カリキュラムの交流の時期から検討されるべきで、三内西小学校では、「交流シート」を工夫しているという。同一の交流でも、幼保小のねらいを明記することで、校種によっての違いが確認できるほか、「指導の流れ、写真、交流後のそれぞれの感想、次年度に向けた改善点を記載」する方法で、「スタートカリキュラム修正に欠かせないのが、幼稚園や保育所の意見」である。これによって、幼稚園や保育所にとっても、「小学校入学直後のカリキュラムや子どもたちの様子がわかり、安心して送り出すことができるようになった」という報告である<sup>30</sup>。

この種のカリキュラムが実施されるようになったのは、入学直後の授業中の離席や私語や暴力な

どで小学校教育を混乱に陥れる「小1 プロブレム」として問題視されるようになったからであるが、本来の課題は、幼児の学びを学校の学習につなぐ「学びの連続性」を構築することである。学びの芽生えを的確にとらえ、小学校教育へと導く実践的な研究が求められているのである。

## 結論 課題と展望

以上、高度経済成長後の「成熟社会」に入って、3次にわたる幼稚園教育課程の基準について歴史的考察を進め、かつ、そのモデル的なカリキュラムの特徴を分析して、基準の意味するところを明らかにすることができた。

1989年改訂は、教育課程を6領域から5領域「健康・人間関係・環境・言葉・表現」に変更し、系統的指導から「環境による援助」（新学力観）へと大転換した。(1) 幼児の主体的な生活、(2) 環境による教育、(3) 一人一人の発達特性、(4) 遊びを通しての総合的な指導という新方針で、生涯学習社会における自己教育力の育成に繋げようというねらいである。改訂の方向性を倉橋惣三の「生活を、生活で、生活へ」という営みを重視する「生活」観と重ねて理解する委員の意見も見られたが、小学校で「生活科」は新設されたものの、かつての生活カリキュラムではないので、小学校との連続性は限定的であった。むしろその「生活」観は、「教え込み」が支配的な学校とは対立するもので、準備教育に対しては否定的でアンチ学校的傾向性すら帯びていた。しかし、幼稚園教育の実態は、最終報告書が指摘したように、読み書き算や英語・音楽など小学校への準備教育が一般化しており、幼稚園教育要領の方針とは乖離した状況にあった。

1998年改訂では、教師の「援助」における計画的な指導性が要請され、かつ、3歳児からの3年保育のカリキュラム編成が課題とされた。そのあり方として、「自我の芽生え」に対応が求められたことも注目しなければならない。改訂のこの時期は、学校全般に、子どもたちの心の問題を背景に小中高全般につめこみ教育が反省され、「自ら学び、自ら考え、生きる力」となる学びが重視されて「総合的な学習の時間」が設置されるに至る。そこで幼稚園教師の役割は、一人一人の幼児が文字や数量について自然に関心を持ち認識を深めるような企画を準備する、あるいはそういう関心や認識の機会を逃さないで指導性を発揮することが求められた。カリキュラム編成の観点から見て影響が大きかったのは、幼・小連携教育と「預かり保育」の開始である。「5歳児の幼児と小学生たちとの交流活動の年間プラン」などはその例である。これは少子化社会となって経営が困難な幼稚園のニーズには叶うものであったが、その実、容易ではなかった。

そして2008年改訂に至って、幼・保・小接続カリキュラムと小学校のスタートカリキュラムが本格的な課題となった。アンチ準備教育から、ある意味では、にわかに幼・小接続カリキュラムの具体化が迫られることになった。「幼児の生活」を重視する伝統的な幼児教育観が支配的な幼稚園において、実態は読み書き算や英語・音楽の早期教育が一般化しているねじれた状況にあって、改訂の意向を受けた「芽生え」研究が、ややもすると小学校への短絡的な準備教育に出してしまうことが懸念される。幼稚園が本格的に小学校の準備教育機関としての役割を求められる時代が来たと

言えるが、これにどのように応えるのか、幼稚園教育は正念場にある。これまで大切にされてきた「幼児の生活」の概念はいつのまにか曖昧になっているが、改めて「幼児の生活」の何を求めて大切にしてきたのか、その構成要件を分析し、幼・小接続カリキュラムにおいて生かすべき「生活」とは何かを再吟味することが必要と思われる。

# 【註】

- 1 拙著「幼稚園教育課程の基準とモデル・カリキュラムに関する歴史的考察」（白梅学園大学子ども学研究所「子ども学」編集委員会『子ども学』第2号 2014年5月17日
- 2 文部省『幼稚園教育指導書 増補版』平成元年12月 文部省初等中等教育局長菱村幸彦「まえがき」。以下、幼稚園教育要領は同書による。
- 3 拙著『学習指導要領は国民形成の設計書—その能力観と歴史の変遷—』の第10章を参照。
- 4 河野重男編著『新しい幼稚園教育要領とその展開—子どもと共につくる保育実践をめざして—』「第1章 なぜ今、教育要領は改善なのか」岸井勇雄 18～19頁 チャイルド本社 1989年6月1日
- 5 同上書 「第1章 なぜ今、教育要領は改善なのか」岸井勇雄 19頁
- 6 同上書 「第4章 幼稚園教育要領の構造と内容」高杉自子（高杉教育研究所主宰） 46～47頁
- 7 栃木県栃木市立栃木第3小学校「学校の特色を生かし、自ら学ぶ意欲を高める教育課程の実践—基礎・基本を重視し個性を生かす指導—」（文部省小学校課編『初等教育資料』平成5年7月臨時増刊号 598号） 17頁
- 8 文部省『幼稚園教育要領 平成元年3月』大蔵省印刷局 平成元年3月 1頁
- 9 文部省『幼稚園教育指導書 増補版』平成元年12月 10～20頁
- 10 前掲『新しい幼稚園教育要領とその展開—子どもと共につくる保育実践をめざして—』 50～51頁
- 11 『倉橋惣三選集』第4巻所収「系統的保育案の解説」（昭和10年7月）フレーベル館 昭和54年5月 295頁
- 12 『倉橋惣三選集』第3巻所収「就学前の教育」（昭和6年）昭和54年8月31日 423頁
- 13 同上書 429頁
- 14 前掲『幼稚園教育指導書 増補版』平成元年12月 26～28頁
- 15 前掲『新しい幼稚園教育要領とその展開—子どもと共につくる保育実践をめざして—』「第4章 幼稚園教育要領の構造と内容」高杉自子（高杉教育研究所主宰） 46～48頁
- 16 前掲『幼稚園教育指導書 増補版』82頁、190頁、83頁、85頁、90頁
- 17 同上書 93頁
- 18 前掲『新しい幼稚園教育要領とその展開—子どもと共につくる保育実践をめざして—』 257～258頁
- 19 文部科学省 HP：[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/004/toushin/971101.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/004/toushin/971101.htm)（2013/11/1）以下、「最終報告」はこれによる。
- 20 文部省『幼稚園教育要領 平成10年12月』大蔵省印刷局 平成10年12月 1頁
- 21 森上史朗・高杉自子・柴崎正行編『平成10年改訂対応 幼稚園教育要領解説』フレーベル館 2004年4月 66～67頁
- 22 文部省『幼稚園教育要領解説 平成11年6月』フレーベル館 平成11年6月 第3章「第2節 一般的な留意事項」の「5 教師の役割」 167～169頁
- 23 前掲『平成10年改訂対応 幼稚園教育要領解説』 71頁、森上はこの方針の妥当性に対して疑問を呈している。
- 24 東京都中央区立有馬幼稚園（岩城眞佐子）「幼・小の滑らかな接続を図るための指導計画の工夫」（文部科学省初等教育課・幼児教育課編『初等教育資料』761号 東洋館 平成14年11月 20～25頁）
- 25 岡山県金光町「預かり保育年間指導計画（4・5歳児）」、「日案例 3月3日（木）」（文部省小学校課・幼稚園課編『初等教育資料』第714号 東洋館 平成11年12月 198-205
- 26 文部科学省 HP、[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/information/1290361.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/information/1290361.htm)（2013/11/01）以下これによる。

- 
- 27 文部省初等中等教育局幼児教育課教科調査官篠原孝子「幼稚園教育要領の改訂」（文部省教育課程課・幼児教育課編『初等教育資料』 834 号 平成 20 年 5 月 6 頁）
  - 28 同上書 9 頁
  - 29 滋賀県とらひめ幼稚園・虎姫小学校（阪田真）「合同研修による教員の相互理解を生かした幼小連携の取組」（文部科学省教育課程課 / 幼児教育課編『初等教育資料』 856 号 平成 22 年 1 月 東洋館 24～29 頁）
  - 30 青森県青森市立三内西小学校長北澤祐一「『接続カリキュラム』と『スタートカリキュラム』のつながり」（文部科学省教育課程課 / 幼児教育課編『初等教育資料』 893 号 平成 24 年 12 月 東洋館 20～25 頁）